

司馬遷の経済思想

——市場経済をめぐる——

鹿 謂 慧 著
桑 田 幸 三 訳

拙論「史記経済篇の研究」は愛知学泉大学の桑田幸三教授により翻訳され、1996年2月同大学の「経営研究」に掲載された。

この論文は主として『史記』の経済篇すなわち「貨殖列伝」と「平準書」両篇の相互関係について分析・研究したものであった。桑田教授は翻訳にあたって、「20世紀末の時点に立つわれわれは、新しい視点に立って再出発すべきではないか」との示唆を与えられた。古典的史料に新しい解釈を目指す私は、今回は「市場経済」の角度から分析・研究を進めたい。

私はひたすら司馬遷経済思想の研究に従事し、既に十余篇の関係論文を発表している。これらの研究にあたって、われわれは伝統的観念の束縛を受けてか、市場経済の角度から司馬遷の経済思想にアプローチすることなく、従ってその経済理論の価値の深層への接近を困難にしてきた。桑田教授によれば、司馬遷の経済思想とヨーロッパの例えばアダム・スミスの学説とは非常に類似しているという。桑田教授の司馬遷思想に対する高い評価は、現時日本市場経済の高度発展と直接関係しているのかも知れない。われわれが市場経済の角度から、司馬遷の経済思想に対して再検討を加えることは大変有意義なことと考えられる。

1. 市場経済の必然性

現在に至るまで、中国の学会においては「封建社会市場経済」の概念は提起されていない。「封建社会」研究の伝統的な観点としては、①封建経済は自給自足的な自然経済である、②封建社会の商品経済もまた小商品経済である、③市場商品の主要な来源は農民および手工業者の生産物で自家消費しきれない部分である、等があげられる。この種の観点は中国の学者のみでなく、西洋の学者にも同様の見方が採られている。たとえば権威ある『ケンブリッジ中国史』は、多くの箇所では中国の封建経済について、このような研究を見せている。疑いもなくこの種の観点は比較的正確に封建経済の現実を反映している。しかし、われわれはこの種の反映が全面的であるとは言えないことをみすごしてはならない。この種の観点は、中国の封建社会とりわけ早期封建経済の繁栄と発展を全面的に反映することはできないのである。

自然経済はずっと封建経済の主体であった。けれども、市場経済はまたずっと封建経済の重要な構成部分であった。都市の中では市場経済が社会経済の主体であった。春秋戦国からこの方、中国の都市は比較的早く発展した。都市生活者には官吏がいただけではなく、数多くの市民がいたのである。都市の市民の多くは、既に耕作に頼って生活することはできず、商業ないし市場に依存して生活していたのである。彼ら以外にも農村や都市の郊外で生活する商人や手工業者がいた。後者は自己の耕地を所有してはいたが、その多くはなおも都市での市場経済を主体としていた。彼らは既に農業収入を得ていたが、商業収入も得ていた。これらの人々が封建社会における市場経済の主役であった。彼らの経済活動が封建経済の一部分を組織していた。史学家としての司馬遷はこの一点に注目し、検討を加えたのである。

司馬遷は、彼の著『史記』の中で、われわれに対して一つの市場経済の大きい発展した社会を開示している。中国における市場経済の大発展は春秋戦国の時代に始まる。西洋諸国にくらべ遙かに早い時期である。春秋戦国期には諸侯が相争ったが、市場経済の発展には全く影響しなかった。市場経済の

発展に伴って、一群の大都市および大商人が出現した。斉国の首都の人口は「汗を揮えば雨の如し」の水準に達したという（戦国斉策）。

春秋戦国期の著名な大商人には、范蠡（はんれい）、白圭（はくけい）、子貢（しこう）等があり、彼らの商業経営戦略にはそれぞれ特徴がある。子貢は結駟連騎（けっしれんき＝車馬を並べて行く、行列の盛んなさま）、束帛（そくはく＝絹の贈り物）以て諸侯に聘享（へいきょう＝交際・宴会）したが、至る所の国君は庭に降り対等の礼を行ったという。諸侯相争う戦争の時代にも、商人たちのコングロマリットの商業経営は全く妨害されなかった訳である。烏（う）氏の倮（か）は牧畜を業としたが、絹織物を北方民族の王に献じ、引き替えに十倍もの家畜を得た。家畜の多いこと、馬牛を谷単位で量るほどであった。秦の始皇帝は倮を封君なみに待遇し、春秋の儀式にも参列させた。

巴（は）の寡婦の清は、先祖が水銀鉞山を開発して以来その利益を独占すること数代に及び、莫大な資産を貯えた。清は寡婦であったが、よく経営・蓄財に励んだ貞婦として始皇帝は客分の扱いをし、「女懷清台」を造営したという（貨殖列伝・平準書）。

春秋戦国期は市場経済の一大発展期であり、また、商人や手工業者の地位が最高になった時期でもある。諸侯が相争う時代においては、一般的に見て、軍官謀士こそが統治者にとって最も重視される筈である。ところが「貨殖列伝」によって見れば、商人や手工業者の地位がこれらの軍官・謀士たちよりも低くは無く、むしろ彼らよりも尚高いことが知られる。商人・手工業者の地位の向上はまた、市場経済の発展および彼らの経済的な実力とも不可分の関係にあった。諸侯たちの覇権争奪も彼らの経済的支持を離れることはできなかったし、漢代になると、市場経済はまた一段と発展を遂げた。

漢興りて海内一となり、関梁を開き（関門を撤廃し通行税を廃止した）、山沢の禁を緩む（山沢資源開発の禁制を緩和する）。ここを以て富商・大賈

(たいこ＝大商人) 天下を周流し、交易の物、通ぜざるはなく、その欲する所を得。而して豪傑・諸侯・疆族を京師に移す。(貨殖伝)

と司馬遷は述べている。国家の統一は商人の商業経営に新しい条件を創り出した。商人及び手工業者は、一種の強大な社会的勢力を形成していた。彼らは郡国に賈し、天下に周流した。商人は経済実力に依拠して政府の官僚と拮抗した。その享樂は封君に比し、王者と樂を同じくしたのである。前漢武帝の時期になって、商人の勢力はさらに一步進んで壮大となった。富商大賈あるいは財をとどめ、貧を役し、大規模な運輸・蓄財を行って利殖し、封君は皆、首を垂れて給を仰ぐ、と言う有様である。誇り高き封君が皆、富商大賈に依存して生活せざるを得ない。商人勢力の盛大なること、ここに極まった観がある。

中国市場経済の発展は、都市の出現にも表現される。中国の都市は従来、一地方の政治統合中心として観察され、経済的角度からの研究は極めて稀であった。この方面においても司馬遷は第一人者であった。彼の見方からすれば、都市は第一に経済・貿易の中心であり、その次に初めて政治統合の中心となる。都市は市場経済発展の必然的結果であり、都市の出現と発展はまた、市場経済の発展を促進したのである。

都市と市場経済とは密接不可分な双子姉妹である。司馬遷はまず、当時最大の商業都市―長安を分析する。

司馬遷は長安に直接アプローチするのではなく、長安周辺の衛星都市の歴史から始める。そうした方が人をして長安の出現と市場経済発展の関係をより一層明晰に読みとらせ得ると考えたのであろう。

関中は西周の発源地である。周文王の前、その祖先はしばしば此の地へ遷都した。どの折りの遷都でも皆、農業発展への有利さが考慮された。「故に其の民はなお先王の遺風有り、稼穡（農事）を好み五穀を殖やす」(貨殖伝)と言うように、人々は皆本来真面目であり、奸邪を敢えてしない。武王より後は首都が五穀の栽培に有利であると言うだけでは決して満足しなくなった。引き続き東方へ遷都し、東へ遷れば遷る程、人口が一層多くなり、人々の従

事する經濟活動はいよいよ多端となり、また、ますます富裕になり、都市もまた一層繁華になった。

秦の繆公が雍に都すると、雍が甘肅と四川との交通の要衝であり、物産も豊富なことから、商人も多きを数えた。秦の孝公は櫟邑に都したが、櫟邑は雍よりもなお発達しており、この時商人がただ多いというだけでなく、〈大商人〉が多かったと言う。秦国が最後に都したのが咸陽である。それで漢も咸陽に都した。漢代にはまた長安にも都した。

関中は南は巴・蜀（四川）に通じ、西は天水・隴西（甘肅）に連なり、北は北地・上郡（陝西＝せんせい）に接する。南に巴・蜀の扈（くちなし＝染料）、生薑（きょう＝はじかみ）、丹沙（水銀）、石・銅・鉄・竹木の器がある。西には羌中（きょうちゅう＝甘肅・青海）の利あり、北には戎・翟（北方の民族）の家畜があり、その牧畜の豊かなことは天下第一である（貨殖伝）。

関中また長安は市場經濟の發展の上で、特によい条件を備えていた。長安の諸陵には「四方より幅湊し並び至りて会す。地小なるも人衆し。故にその民ますます玩巧（巧みにあそび戯れる）にして、末を事とす」（貨殖伝）。関中は本来、商工業を志向する伝統があった。それが、長安都城の建設によって魚が水を得たかのように、勢いづいたわけである。

長安の市場經濟の發展がもたらしたものは、ただに長安一市の繁榮・發展のみにとどまらず、関中地域全体の飛躍的發展であったことを、われわれは銘記すべきである。かくして、「関中の土地は天下の三分の一であり、人口も十分の三に過ぎないが、その富を量れば十分の六を占める」（貨殖伝）のである。（訳注、関中の地は、ほぼ現在の陝西省にあたる）

このような状況は現代社会における經濟的發展の實際と比べ、何とよく符合していることであろうか。

市場經濟の發達した地域では、土地は狭く人口も少ないが、その財富はかの土地広く人口の多い地域に較べて遙かに超越している。經濟・生産方式の相違から、各地域の發展の不均衡が、また、一人当たり所有資産の不均衡がもたらされる。とりわけ、都市における都市住民と農民との經營方式の相違

によって、両者の間に経済収入の上で大きなギャップが生まれたわけである。司馬遷が指摘した、この種の社会経済発展の普遍的法則は、深遠な歴史的価値とともに、直接的な現実価値をも有している。司馬遷は相異なる生産経営方式が財富の差異をもたらし得ることを指摘すると同時に、社会経済全体の発展の中における都市の地位を十分に肯定している。司馬遷の経済思想全体の観点からみれば、彼はすでに都市経済が社会経済全体の龍頭（牽引車）であることを、比較的明確に認識していたといえる。司馬遷のこのような適確な認識は、封建社会によっては決して受け入れられることなく、ずっと現代に至るまで、多くの人はなおも一種の正確な認識を欠いていた。

司馬遷はわれわれに対して一つの繁栄・発展した市場経済社会を開示するのみでなく、市場経済が社会経済発展の必然であることを論証した。「貨殖列伝」の中で司馬遷はまず、老子の〈小国寡民〉的な閉鎖社会を批判する。〈小国寡民〉の社会においては、商品というものがない。市場経済もまた無いのである。司馬遷の見る所では、社会経済の発展と物質・財富の不斷の増加につれて、人々の生活に対する要求もまた不斷に変化し増大する。人々は最大の努力を尽くして、自己の生活欲求を満足させようとする。美酒佳肴があれば、人々は決してあの原始的な食生活の時代に恋々とはしない。大廈・高樓があれば、決して巢居穴居の生活に戻りはしない。人々が皆、自己の生活欲望の満足を以て驕奢を為す時に、いかにして人々の生活欲求を満足させるか、この点について中国の思想家や政治家は異なった答えをもっている。但し、古代にあつては司馬遷のように明確に市場経済の発展を以て人々の生活欲求を満足させることを提起する者はまだ少数であつた。中国の思想家や政治家について見るに、人民の生活欲求を満足させるには、一途に農業の発展あるのみで、いわば自然経済の路線であり、その自然経済は人民に粗茶淡飯、質素な食生活を維持させる経済である。多くの時期には、この目的にさえも到達し得なかった。

司馬遷が主張するのは、人民の各方面の生活需要を満足させ、それも、極く簡素な衣食の求めだけではなく、人民の多方面の需要を満足させるために

は、多様な資源が必要である。ここに言う資源とは、すなわち農・工・商・虞（ぐ＝林・水産・鉱業）の四業種である。これら四業種の発展した社会には、明らかに、一個の自然經濟社会ではなくて、一個の市場經濟社会が認められる。ここにおいて、われわれは、歴史学者のいわゆる〈男耕女織〉型の自然經濟イメージではなくて、〈天下熙熙として皆利の為に來たり，天下壤壤として皆利の為に往く〉求利社会のイメージを見ることとなる。社会の成員は一人残らずすべて利を求める者である。上は千乗の王から，萬家の侯，百室の君も，匹夫編戸の民に至るまでも，そうである。

大変興味深いことには，社会の〈利を求める者〉の中に，〈利〉については余りものを言わない〈賢人〉や〈世間に評判の高い人〉たちがその隊列の最先頭に位置づけられていることである。社会における一切の活動を〈利益の追求〉に帰結するのである。これは，社会に対する一種の本質にかかわる認識の提起と言わざるを得ない。

この市場經濟の社会においては，すべての物が商品となり得る。西方の木材・竹材・玉石，東方の魚塩・漆糸，南方の梓・しょうがの類，金・錫・水銀，北方の馬・牛・羊等々すべて皆，人々の手を経て商品と成るのである。人民生活の必需品である食糧は言うまでもない。「貨殖列伝」からわれわれは，商品市場における一つの重要な商品が食糧であり，食糧の經營によって富を築いた貨殖者が少なくないことが理解できる。また，「平準書」からは，われわれは，官商であろうと私営商人であろうと，取り扱う商品の相当な部分が農・副産品であること，そして各地の土産・特産・農副産品こそが商人の歓迎するところであったことが理解できる。

この市場經濟の社会においては，商業や手工業は農業とは相い矛盾するものではなくて，相互に依存し，相互に促進しあう関係にある。人々の需要するものはすべて農・工・商・虞の四部門の共同によって完全に供給される。

農を待ってこれを食し，虞してこれを出し，工してこれを成し，商してこれを通ず（貨殖伝）という様に，これら四部門が市場經濟の生産及び流通の大動脈を構成していたのである。農工虞は生産の部門であり，商は流通の部

門である。農・虞の不断の発展に伴って、さらに多くの人手が商事活動のために必要とされた。そうでなければ、多くの商品の流通が出来なくなり、人々の生活需要を満足させることが出来なくなる。当然、農工商虞の発展がなければ、商業は商品流通の源泉を失うこととなる。要するに、この市場経済の社会においては、農工商虞は相互に不可欠なのである。

農出さざればすなわち 其の食乏しく

工出さざればすなわち 其の事乏しく

商出さざればすなわち 三宝絶え

虞出さざればすなわち 財、匱少（きしょう＝乏しく少ない）し

財、匱少すれば 山沢、ひらけず（周書）

市場経済社会の四大部門を構成する農・工・商・虞は相互に不可欠であり、この四種の経済活動に従事する人手から考えても同様である。農民は商人・手工業者を離れては暮らせない。後者もまた前者から離れることは出来ない。市場経済活動の中で、誰ひとり、有っても無くてもよい人はいない。まして、社会に対して害になる人はいない。中国の伝統的な観点からいえば、商人・手工業者は農業を妨げるだけではなく、政治を妨げ民俗を阻害するものであった。司馬遷の経済観点は、市場経済社会に対する闡明にのみとどまることなく、中国の伝統的な重農抑商観点に対する批判でもあった。

司馬遷の観点の価値は、ただ、市場経済に対する認識論述の表現のみにとどまらず、もっと重要なことは、彼が市場経済を一種の社会経済発展の必然と認めていたことである。市場経済は他の場合とは異なり、政府の行為を必要としないのである。人々は市場経済の社会においては、農民は田間の耕作に不断に従事し、虞人は山林の生産につとめ、工人は各種の加工に、商人はまた各種商品の市場での売買にと、すべての人々が全力を発揮してそれぞれの能力を傾注し、自己の事業を楽しみとする。政府の指図を待つこともなく、まして、他人の督促を必要ともしない。市場経済の発展はまさに「水の低きに就くがごとく、昼も夜も止む時なく、招かずして自ら来たり、求めずして民これを出す」のである。だから、市場経済の発展は「道の符合するところ

であり、自然の効験である」。(貨殖伝)

2. 市場経済と富国強兵の戦略

古代中国にあつては、談が富国強兵のことに及ぶと、基本的には皆、法家の論と考えられた。法家の理論に従えば、国を富まし兵を強くするには、ただ〈尽地力〉の教えあるのみ。ひたすら農業の発展あるのみ。それ以外は全て富国強兵に有害である。そこで、彼らは〈重農抑商〉を主張する。いかにして富国強兵ならしめるか、司馬遷は具体的な論述を欠いている。しかし、『史記』によってわれわれはそれを見いだすことができる。司馬遷の観点ははっきりしており見出し易い。司馬遷は農を以て国を富ますことに、決して反対ではない。ただ、この種の単純な〈富国強兵〉方式を主張はしない。司馬遷が主張するのは、〈農商富国〉である。市場経済を発展させて国を富まそうと言うのである。『史記』の中で、司馬遷は春秋戦国各諸侯の興亡について分析研究を進めている。彼は法家が農を以て富国強兵の上で獲得した成果について十分肯定していた。それと同時に、その他の富国方式についても研究している。春秋戦国期においては、新しい生産方式の導入によって、農業の発展が刺激された。しかし、発展の速度から言えば、商業や手工業の発展速度の早さには及ばなかった。新しい生産方式の変化・解放は、ただ農業だけではなかった。同時に商業・手工業にも同様の解放が得られた。商業・手工業の特殊の状況から、それらの発展はもっと早かった。春秋戦国諸侯が相い争ったものは単に軍事的な力量だけではなくて、さらに重要であったのは、やはり経済実力の争いであつた。強兵の前提は富国であつた。各国の賢明な諸侯たちは皆、この一点に注目した。富国の方式から見ると、ただ法家の主張する「尽地力」の教えに努めるだけでなく、さらに皆非常な熱意を以て、商業・手工業を発展させたのである。だから、春秋戦国期に、商業や手工業が長足の発展を達成し得たのは、まさに当然のことと言わねばならない。市場経済を発展させた「富国」の方面で、司馬遷は大変典型的な事例をわれ

われに提供してくれている。『史記』の「貨殖列伝」から、われわれは次のことを見出すことができる。越王勾踐が亡国の恨みに報いることが出来たのは、ただ単に彼が〈臥薪嘗胆〉を成し遂げただけではなくて、更に勾踐の富国強兵は、范蠡・計然の市場経済理論を採用したものであった。范蠡・計然の理論に従えば、国を富ますには、ただ農業を発展させるだけでは足りない。必ず商業・手工業をも発展させ、〈農末俱利〉（農業も商工業もともに発展させる）を達成しなければならない。かくして、田野は開墾が進み、市場も繁栄し得る。二人の市場経済理論に従い、勾踐はこれを修めること十年にして、国富み、厚く戦士にまいなう。土、矢石に赴くこと、渴して飲を得るが如く、遂に強呉に報い、兵を中国に觀（しめ）し、号して五覇と称する訳である。

『史記』の中から、われわれは〈農商富国〉なり、〈市場経済発展型富国〉の一層典型的な事例として、また、斉国を見出すことが出来る。姜太公は斉を治めるに当たって農業の発展をもつて主とはしなかつた。そして、市場経済を発展させた。

《其の女功を勧め、技巧を極め、魚塩を通ず（貨殖伝）》

とある様に、経済は発展し、物品は豊富になった。斉国の都城の人口も多くなり、ひとびとの志向するセンターとなった。

《斉、天下に冠帯衣履し、海岱の間、袂（たもと）をおさめて往きて朝す（貨殖伝）》

これによって、当時の斉都の賑わいが推察される。

斉国の経済を受け継いだのは管仲である。彼がリードしたのはやはり、市場経済発展型富国の路線であった。管仲が設置した輕重府の重要なのはすべて市場経済発展の機構であった。われわれは、管仲が市場経済の発展をいかに重視していたかを想像することが出来る。以後、斉国の都城の臨淄は当時の大都市となった。これも、姜太公と管仲とが、市場経済の発展を重視したことと、直接の関係があると言えよう。

秦朝以後は、法家の経済思想が指導的地位を占めた。ただし、法家の重農

抑商思想は、自然経済の長期統治には有利であったが、富国富民の路線ではなく、とりわけ、国家財政収入の増加には役に立たなかった。この一点については、漢の武帝の実践によって証明される。漢の武帝は、一個の雄才大略を備えた皇帝であった。彼は、多年に亘る蓄積を投入し毅然として匈奴反撃の戦争を発動した。しかし、交戦数年にして国家財政は不足を告げることが明白となった。〈府庫益々虚し〉である。戦争の深化進行に随い、財政はいよいよ困難を強め、〈大農（大蔵省）に備蓄してあった金銭も、つねにとぼしく〉なり、年々の税収も既に使い果たし、それでも戦士の費用を賄うに足らず、ついには、財政の困難は、〈戦士頗る碌を得ず〉という状態となった。いまや財政の困難は、武帝にとって早急に解決を迫られる課題となった。この問題が解決しなければ、匈奴に対する作戦は継続進行し得ないこととなる。いろいろ試行錯誤を重ねた末、武帝は〈以商制商〉の市場経済発展政策を採用したのである。彼は、大製塩商の東郭咸陽を〈大農〉に起用し、洛陽の賈人の子、桑弘羊を〈侍中〉に起用した。武帝はこれらの商人出身の新官僚を信任し、屢々抜擢した。孔僅・東郭咸陽・桑弘羊たちが採用したのは、官営商業を極力発展させる政策であった。まず、彼らは利潤の最も大きい塩・鉄を国有化し、国家の手で経営することとした。桑弘羊は、〈大農令〉に登用された後、一步進めて官営商業を発展させた。すなわち、塩鉄の経営組織を整頓し、〈均輸法〉を全面的に実行し、〈平準〉を京師に置いて、天下の委積物資を全て受納させたのである。桑弘羊の統制のもとで、漢代の私的商人は厳しい衝撃を受けたけれども、国営商業の方は却って飛躍的な発展を遂げた。多数の政府の官僚が政治から経済の分野に転向した。官吏たちは市に坐し売場を連ねた。物を売り利を求め、営まざるは無しという状況で、立派な商人になってしまった。

司馬遷は武帝と桑弘羊の抑商政策に対し非常に不満であったが、彼らの市場経済政策の獲得した成果については十分な肯定的評価を与えている。例えば

《民、賦を益さずして、天下の用、饒（ゆた）かなり。》（平準書）

の言は武帝と桑弘羊の市場経済発展型の富国政策の成功を、実践的に証明し

ている。彼ら兩人と司馬遷の違いは、一方は官營經濟の發展を主張し、他方は私營商業の發展を主張する所にある。司馬遷の立場からみれば、私營商業さえ發展すれば、税収はそれにつれて増加し、国家も富裕になるのである。

武帝、桑弘羊そして司馬遷の三者は、市場經濟の發展に関して、一致しない所もあり、また、共通の部分もあつた。彼らの理論と実際とは封建經濟の發展とか、国家の富強や人民の富足とかに対して、すべて有用であり、学ぶべきものがあつたのであるが、彼らの理論と実践とは、不幸にも皆、後世の否定や批判を蒙ることとなった。

3. 市場經濟の主人公

秦代以降、商人・手工業者の地位は、悪化し始めた。国家は、法律の上から彼らに対して抑制・打撃を加えた。封建文人達は社会世論の上から、評価を低めていった。商業や手工業も排斥される立場にあつた。理論の上から言えば、彼らの主張は、農業生産の發展とか社会習俗の奢侈化の防止とかいう大義名分を持っていた。

市場經濟の發展は商人や手工業者を離れることは出来ない。彼らこそ市場經濟の主人公なのである。だから、市場經濟を發展させる為には、ぜひとも、商人・手工業者の社会經濟全体の發展における地位を、十分に肯定することが必要である。まさに、このようにして、司馬遷は〈貨殖列伝〉の中で、商人や手工業者に対して、高度の評価を与えているのである。

〈貨殖列伝〉には、全部で三十余人の貨殖者が登場する。彼らは、すべて貨殖者ではあるけれども、おのおのの特長がある。

范蠡は勾踐を助けて呉国を打ち破った後、高位高官を望む心はなく、かといって、隠者として身にかくす気持も無かった。彼は、計然の經濟理論を引き続き実践しようとした。范蠡・計然の市場經濟の観点からすれば、ただ国を富ませ得るだけでなく、家を富ませることも可能である。正にこの立場から、范蠡は、功成り名遂げた後、高官には昇らずに、商業の經營に転進した

のである。計然の政策は七カ条であったが、勾踐はそのうち五カ条を採用した。范蠡は、その全部を実践しようと考えた。范蠡は、最終的に山東の陶の地を選んで拠点とし、商業の経営に従事した。かくして、19年の間に3回も千金の巨財を蓄積し（貨殖伝）、一代の大富豪となった。人々は陶の朱公と尊称した。范蠡は国の政治にも道を付けたが、個別商業の経営にも戦略を適用した、というわけである。

子貢は孔門の弟子である。しかし、学問での仕官には意欲を燃やさず、財産の囤積に興味を覚えた。孔子70人の弟子の中で、子貢は富裕第一であった。子貢は外出には四頭立ての馬車に坐し、騎兵を連れ、国君とも対等に交際した。孔子の到る所どこでも、子貢が老師のために経済援助をして、孔子の名を天下に布揚させたことを、理解する人は多くはなかろう。

李悝と白圭は、同時代同国の人である。ただし、非常に顕著な違いがある。一方は〈尽地力〉の教えで著名であり、他方は〈治生〉で有名である。一人は農業経済を研究し、他方は市場経済を研究する。白圭は市場経済を研究したが、実践が有るだけでなく、その上、理論もある。司馬遷は、彼の理論観点を称賛して、伊尹・周公の謀計や、孫子の兵法、商鞅の法律などにひけを取らない、と言っている（貨殖列伝）。また、天下、治生（生産の管理）を言う者、白圭を祖とす、とも言っている。

春秋戦国期においては、市場経済を発展させる一種の緩やかな環境があり、商人も特殊な地位を保持していた。国家的な統一が進むにつれて、国家は重農抑商政策を実行し、商人や手工業者はもはや統治者の賓客とされることは無くなった。但し、決して彼らが市場経済を発展させるのを阻止しようとはしなかった。

秦の始皇帝は七科の謫を実行したが、その中に、商人と手工業者が含まれていた。彼らの中の多くの者は、謫遣に遭うたが為に転落してしまったというのではない。蜀の卓氏の祖先は趙国の製鉄商人であった。趙国の滅亡後、秦国が彼らを四川に謫遣しようとした。卓氏と同様に謫遣に遭うた者には、

趙国の多数の貴族がある。彼らは皆自己の錢財を取り出して秦朝の官吏に与えて、少しでも近い地方に移すように望んだ。卓氏夫妻は、二人で車を押し、彼らと一緒に葭萌までやって来た。彼は、錢を出して賄賂とはしないで、遠方の臨邛へ移すように求めた。その理由は、この地は物産が豊富ではない。臨邛は土地が肥沃で、さらに重要なことには、住民が市に巧みで、取引がし易い。言うなれば、向うの方が市場経済発展の外的な環境が整っている、と言う。こうして、卓氏は臨邛に到達し、大いに喜んで鉄山で製鉄に励み、雲南・四川の民を多く雇用し、その資産は童千人を擁するに到ったと言う。千人の企業を設立したわけで、規模の大なることが推察出来る。彼の生活振りは、田池の射獵の樂は、〈人君に擬す〉と称された。

卓氏と同様の命運をたどった者に程鄭がある。程鄭もまた、同時に臨邛へ流謫された。彼は卓氏に学んで、西南の諸族の間にマーケットを広げた。彼の富は程氏に並ぶ程になり、臨邛に同時に二個の製鉄企業を創設した。それには、彼ら二人の正確な経営戦略が直接的に関係している。卓氏は主として現地人と交際し、地場で自己の商品を売買した。程鄭は卓氏とマーケットを争奪するのではなく、専ら西南の少数民族の中にマーケットを開拓したのである。西南の少数民族の地方は、経済の発展が遅れ、鉄製品が乏しかった。漢代の一時期には、政府が嶺南地方への鉄製品の交易を禁止していたこともあって、鉄製品は貴重な商品であった。程鄭はこの一点に考え到ったのである。鉄製品は西南地域から言うなれば、疑いもなく最先進的な生産工具であり、程鄭は西南地域の経済発展に対し、貢献したものと言うべきであろう。

宛の孔氏は、もとは魏の国の人である。流謫に遭って南陽に到達した。大いに製鉄を行い、池塘を造成した。車騎を連ねて諸侯と交際し、かねて商売の利益を挙げた。〈有閑公子の賜与〉の名があつた。孔氏は人と交際する時には、鷹揚に慷慨し、おおいに人々の好感を得ていた。自分の影響力の伝播によって、事業も一層繁盛した。

《家、富を致すこと数千金、故に南陽の商人は、尽く孔氏の雍容にのっとり》と言われている。

商人・手工業者は、金儲けをするだけでなく、市場経済を発展させた。また、社会環境や思想・観念を改変させた。

曹の邴氏は一大製鉄商であり、その富は巨萬に至った。鄒・魯（山東）一帯の至る所、彼の行商の足跡を残さぬ所は無いと言う。鄒・魯は、孔・孟の故郷であり、人民の習俗は文学尊重であった。それが、邴氏の影響を受けて、人々は《多くは文学を去りて利に走る》ようになった。

師史は、《車を転ずること、百を以て数え、郡・国に買して至らざる所無し》と言われた。洛陽の富商の影響を受け、《貧人は富家に事えるを学び、相い誇るに久買（長期の行商）を以てし、しばしば街を通っても我が家には入らなかった。》人々は皆、長期の商事活動を榮譽とし、売買の為には家門を過ぎても、あえて家に入ろうとはしなかったのである。洛陽は市場経済の気象が比較的濃厚な都市であったと言うことが出来よう。この様な環境があれば、自然に、あの師史の様な七千萬の富を築く大商人も生まれてくる訳である。

農牧や工虞商賈の業に努め、営利に励み以て富を成すが如きに至っては、大なるは郡を傾け、中なるは県を傾け、下なるは郷里をかたむけ、数えるに堪ゆべからず（貨殖伝）

という風で、まさに彼ら—商人・手工業者—は、中国古代の市場経済を、繁栄・発展に導くとともに、更に一步進めて肯定すべきことには、また、農業経済の発展をも促進したのである。

司馬遷はこの一点を十分に認識していた。だから、われわれは『史記』の中で、市場経済と農業経済との衝突なり、市場経済のマイナスの作用を見受けることが無いのである。司馬遷の筆に成る商人・手工業者は、すべて社会に貢献する人間であり、貨殖家の一人一人が意気揚々たる、時人から景仰される人間である。彼らは、姦詐なのではなく知謀豊かな人間である。彼らは朝廷の官僚の様に、国家の禄に頼って生活するのではなく、また、貪官汚吏のように人民の財物を搾り取って富を成した訳でもない。彼らは、

《政を害せず、百姓を妨げず、取与に時を以てし財富をふやした（太史公自序）》

また、

《皆、爵邑俸禄有り、法を弄び奸を犯して富むにあらず。尽く推理して去就し、時期を見て行動し、その利益を獲得する。末（商業）を以て富を築き、本（農業）を以てこれを守る。武以て決断し、文を以てこれを守る。（貨殖伝）》

のである。彼らは、社会の中での賢人である。彼らは、市場経済の主人公である。彼らは中国の市場経済発展の過程で、不滅の功績を建てている。彼らはまた、人々が致富を学習する模範である。彼らは自己の金儲け、致富の実践に基いて、人々に告げて言う、

《貧をもって富を求めるには、農は工に如かず、工は商に如かず。繡文を刺すは、市門に依るに如かず。これ、末業は貧者の資たるを言うなり。（貨殖伝）》と。

商業・手工業は、人々が手っとり早く財産を築く捷徑である。市場経済は、ただ国を富まし得るばかりではなく、更に、民をも富まし得るものである。

4. 古代市場経済の理論

司馬遷が、中国の市場経済に関して研究する中で、他の思想家と異なっている点は、彼は市場経済が社会経済発展の必然であり、市場経済を発展させることは、富国強兵及び富民のために通らなければならぬ路であることを指摘するだけでなく、さらに、商人・手工業者の経営管理経験に対する総括を通して、市場経済の発展の為に、理論指導を提供していることである。司馬遷は、商人・手工業者の経営管理の経験に対し、ただ、総括をするだけでなく、理論の上から発展を加えているのである。

中国の封建社会の市場経済と、西洋のそれとは、異なった所がある。中国では、一つの広貌とした市場があり、都市を拠り所としており、広大な農村に向かって放射している。この様にして、商業の経営管理の上で、中国の商人・手工業者は自己特有の、市場経営管理の理論を形成してきた。

市場經濟活動を進める上で重要な一点は、市場予測である。市場予測をうまく行うには、

《時を知り、時に任じ、時に趨く（貨殖伝）》

ことである。〈時〉こそが、市場予測のキーワードの一つである。〈時〉の含意は多様であるが、その第一は〈時用〉である。すなわち、その時の社会がどのような商品を需要しているか、である。含意の第二は〈時期〉である。〈時用〉を了解した前提のもとで、経営者は必ず、〈時期〉を把握しなければならない。時期を失わず、市場の需要の変化の趨勢をよく掌握することである。

市場予測に関して、マクロ予測とミクロ予測とがある。マクロ予測では、主として当時流行の農業豊歉循環論に依拠する。この種の理論に随えば、農業の豊歉は木星の運行と関連がある。木星の運行は一周期が12年で、農業の豊歉（ほうけん＝五穀の豊作と不作）の一周期と認められる。

《歳が金にあれば〈穰〉、水なれば〈毀〉、木なれば〈飢〉、火なれば〈旱〉とする。》

木星の運行が金に至れば、この年は豊年であり、運行して木に至れば小豊年である。運行して水と火に至れば災年である。6歳穰り、6年旱し、12歳に一大飢がある。

この様な自然的な規律の変化に照らして、マーケットの情勢を掌握するのである。范蠡が提起した彼の商業経営原則では

《早にはすなわち船を取る。水にはすなわち車をとる。》

と言う。早年には手回しよく水災年に人々が需要する商品を準備する必要がある。同様に、水災の年には、早年に需要される商品を準備しなければならない。范蠡のこの種の市場予測の観点は、すこぶる先見的であり、市場経営の高遠な着眼は突出している。目先の小利によっては左右されない特長を備えている。古代の市場經濟と現代の市場經濟とは非常に相異がある。古代の商品の主要な物は、各地の土・特産品であり、いわば農業が市場商品の主要な来源である。だから、農業の豊歉が直接に市場の発展に影響する訳である。自然現象の変化に依拠して、市場マクロ予測を進めたわけで、さして驚く程

のことではない。范蠡は市場のマクロ分析を進めるに当たっては、自然循環理論に依拠したばかりではない。市場予測をうまくやる為には、さらに、〈時用〉の物を熟知することが必須であった。

《戦いを知れば、すなわち備えを修め、時用には、すなわち物を知る。二者形わるれば、すなわち萬貨の情、得て観るべきのみ。(貨殖伝)》

戦争の将来を知れば、戦備を為し易い。何が〈時用〉の物かが分かれば、どのような商品を取り扱うべきであるかを知ることが出来る。この二者を具備すれば、マーケットにおける萬貨の相場の動きが、掌に「この通り」と指し示す様に分かり、〈取与以時〉が可能となり、マーケットの相場の変動を根拠として、各種の経営を進めることが出来る。

市場予測の上で、白圭と范蠡とは連携する所もあり、また特異な所もあった。白圭は〈楽観時変〉で著名である。彼が、〈時変〉を観るのに、主として依拠するのは、やはり、自然豊歉循環論である。太陰(歳陰)が卯に到れば豊年である。第二年は災年である。太陰が午に到れば旱年である。旱年が過ぎると好転し始める。太陰が酉に到ると、また豊年となる。豊年が過ぎると、また悪く成る。子の年は大旱の年である。大旱の後にはまた洪水となる。

この様な自然豊歉循環論に依拠して、白圭は食糧経営に従事した。〈時変〉を拠り所として、食糧を取り扱った。豊年に、しっかり食糧を準備しておく。豊年の後は災年であるから、貯えた食糧の価格は、自然、騰貴する。旱年の後は水災年で、平時に蓄積しておいた食糧の価格は一段と高くなり、こうして二倍の利潤を得ることが出来た。かれは更に

《歳熟すれば穀を取りて之に糸・漆を与え、繭出づれば帛絮を取りて之に食を与ふ(貨殖伝)》

と言う経営戦略を編み出した。豊年には穀物を大量に買い取って、代わりに糸や漆を売り与える。繭が出回ると、絹や真綿を買い取って、代わりに食糧を売り与える。季節によって、彼が購入し、また売却する商品は皆、同一商品であることは明らかであるが、価格の上で大きな違いがあるのである。

白圭にはもう一つ、他の人とは違った経営予測の原理がある。

《人棄てれば我取り、人取れば我与える。》（貨殖伝）

人が棄てて安くなれば、我は買い取る。人が取って高くなれば、我は売り与える。というのである。白圭は、商事經營の体験の中から、商品は安ければ必ず高くなり、高ければ必ず安くなることを体得したのである。そこで、マーケットである種の商品が過剰で皆が買わない時に、彼は低価で買い進む。一定の時期になって、この種の商品の価格が上がって来れば、彼はそれを売却する。商事の經營は〈知時〉が必要であるばかりではなく、〈任時〉も必要である。任とは驅使の意。任時はチャンスを活かす意味、〈時用〉のものを經營する含意がある。たとえば、社会に〈時用〉の物が非常に多くある場合、結局、どれを取り扱うのが最適であるか、白圭はこう考える。《貨幣を増やそうと欲するなら、下級の穀物を取れ》と。穀物は人間の生活必需品であり、また、最も普通の商品でもある。その価格は相対的に見れば低廉であり、他の商品を取り扱うのに比べ利益は大きくはない。ただ、それが広汎なマーケットを持っていることから、薄利多売が可能であり、「多の中から利を取り、薄利を不薄に変える」ことが出来る。当然、穀物は〈時用〉の物であるけれども、決して、条件を講じなくてもよい經營分野であると言うのではない。

司馬遷は言う。〈百里、樵（柴）を販（ひさ）がず、千里、穀を販がず〉と。この観点は前者に対する補充である。下級の穀物を取り扱うので、金儲けが出来る。それはコストを抑えて売れ筋を拡げるからである。もし、千里の遠くまで穀物を売り拡げると、必然的にコストが増し、彼の優位が失われる。これは、司馬遷の前記の經營者の経験に対する総括である。商事の經營には、〈趨時〉に善処することが必要である。「すでにに堯（た）れば時と争う」といい、また「取与するに時を以てす」と言う。要するに、〈時機〉を掴み取るには、知謀をこらし〈時機〉が到来すれば絶対に逃さない。戦時の用兵さながらに、敵の不意に出、その不備を攻める。一気に商品をマーケットに投入し、他の商人がまだよく明らかにし得ない時機を待って、また、他の商人が思い決めない商品を購入する。囤積して買を待つ。時機を見計らって在庫を放り出す。白圭の言葉を借りると、「時に趨ること猛獸凶鳥の発するが如し」

となる。白圭にあつては、商事の経営は非常に深遠な学問の一分野であつた。かれは、自己の商事経営の実践を、この様に総括している。

《吾れ、生産を治むること猶、伊尹・呂尚の謀し、孫呉の兵を用い、商鞅の法を行ふが如き也。》

この故に、

《其の智ともに権変するに足らず、勇以て決断するに足らず、仁以て取与する能わず、強守る所ある能わざる者は、吾が術を学ばんと欲すと雖も、終いに之を告げず。》と。

これこそ、一種の高レベルの商事経営の蘊奥と言わざるを得ない。

商事経営の上で、范蠡と計然とは、もう一つ重要な理論を持っていた。

〈積著（せきちょ）の理〉と言う。物を完くするを努め、資金を停滞させない。これが、マーケットにおける商事経営に必須の二か条であると言う。

(1) 努完物 取り扱い商品は質・量ともに完全なること

(2) 無息幣 資金の運転を加速すること

古代の中国において、囤積・居奇（きょき＝奇貨を貯え値上りを待つ）は、マーケットの経営における主要な方式の一つであつた。商品は一定の時間囤積した後、初めて売り出すことが出来た。だから、囤積を要する商品は、必ず、完物＝貴善の品であらねばならず、質・量の好くない商品ではない。腐敗して食（蝕）せる貨は留むるなかれ、と言う。この様な経営思想は他の商人達の採用する所ともなった。

例えば、宣曲の任氏は、一般に消費者が皆、低価格の商品を購買したがる中で、独り貴善を取り、この経営方式を守って、富める者、数世なりと言う。

商事経営の従事は、〈務完物〉を達成するだけでは、まだ足りない、と言う。更に〈無息幣〉の域に達することが必要である、と言う。〈無息幣〉とは、つまり、資金の回転を加速することである。貨幣を手中にして、活用しないままに放置してはならない。中国古代の商人達は既に、明確に、資金と言う物は停滞することなく運転することによって、初めて増殖し得る物だと言うことを認識していた。だから、彼らの資金運転に対する要求は、格別に

高いものがあつた。「行くこと流水の如く」あれと言う。どの様にして資金の回転を加速するか。范蠡の経験はこうである。〈無敢居貴〉。貴ければ糞土の如く売り出し、賤しければ珠玉の如く買い取る、のである。言い換えると、過分の高値を狙いすぎてはならない。価格が上がって一定の程度になれば、糞土と同様に少しも惜しまずに放り出す。同じ道理で、ある種の製品の価格の下降が一定の限界に達した時には、他の人々が好い商品ではないと認めても、珍宝と同様に買い進める。その理論的な抛り所は

《貴，上り極まれば則ち賤に反り，賤，下り極まれば則ち貴に反る》

と言うにある。ひたすら、価格はまだ上がると思い詰めても、結果は下落し、利益が得られないばかりか、却って損失を生じる。更に重要なことは、資金の回転に対する影響である。資金回転に対する重要性について、司馬遷は廉賈・貪賈の例で次のように説明している。

貪心盛んな商人は囤積・居奇などで高値を待ち望む。値上がりしても、まだ上がると見る。それにつれて、資金の回転が緩慢になり、その結果は、ただ十分の三の利潤を得るにすぎない。廉賈は、敢えて貴にとどまらず、不断に買い進み、売り出し、資金回転を加速する。前者と比較すると、投入資金は同一でも、却って、十分の五の利潤を獲得する。これ即ち、世に言う〈貪賈三之、廉賈五之〉である。

資金回転の速度が、商事経営の成績に直接影響すると言うことは、中国古代の商人の共通認識である。司馬遷は独特の見解を持っている。彼は既に商事経営資金の回転は、生産経営資金の回転よりも、早くあらねばならぬ、と言うことを発見していた。従って一定金額の商品を取り扱う経営は、同一金額の商品を生産する経営に比し、必要な資金はずっと少なくてよいのだが、取得する利潤は却って大となる。貨殖列伝の中で、司馬遷は例を挙げて説明を進めている。少し整理して要点を示すと別表のようになる。

まず馬について、①と②とを比較すると、

(200 頭 - 50 頭) ÷ 50 頭 = 3 となる。

商人は農牧民に比べて、獲得する利潤は 300 % も高くなり得る。

資本の種別と利潤の比較

種別 \ 投資対象	馬	牛
①生産的資本	50 頭 (200 蹄)	167 頭 (蹄角 1000)
②流通的資本	200 頭 (蹄蹴 1000)	250 頭 (1000 足)

同様に、牛について比較すると

$$(250 \text{ 頭} - 167 \text{ 頭}) \div 167 \text{ 頭} = 0.5$$

となり、商人の獲得利潤は農牧民のそれに比べ、50 %高くなる。

羊や豚についても、商人は3倍の利潤をあげうる。

この様な観察の結論として、司馬遷は

〈貧を以て富を求めるに、農は工に如かず、工は商に如かず〉と言う。

商事経営の上で、優秀な商人となるためには、マーケット予測や〈趨時〉・〈任時〉を適確に実行するばかりでなく〈用人〉においても優っていなければならない。

《善く生を治める者は、能く人を選んで時に任ず》とある。

春秋戦国の時期には、商人達はその従事する商事経営が一般に皆、一定の規模を備えており、零細商人の比較を絶するものであった。ある者は車を転すること百を以て数え、〈天下に周流〉した。彼らの従事する所はおおむね貿易であった。傘下には皆、相当数量のワーカーを雇用していた。一般的に言って、大商人は皆、都会に鎮座して指揮を執り、マクロ的な策略を決断し、具体的な経営活動は部下のワーカーに行わせたのである。そこで、彼らが利潤を上げ得るか否かは、多くの場合、ワーカー達が精鋭・有能であるかどうかにかかっていた。だから、〈択人〉、人材の選抜はマーケットにおける商事経営管理の重大問題の一つとなっていたのである。この一点に関し、商人ではない司馬遷が、非常に明確な認識を持っていたものである。司馬遷は次のよ

うに言う。

《貧富の道は、これを奪与すること莫し。而して、巧みなる者は余有り、拙なる者は足らず》と。

ただし、貧富の道はどのような人に対しても皆、平等である。ただ、マーケット経営従事に適した人材の掌握・運用が決め手である。それが出来れば富裕となり、出来なければ貧窮すると言う。

司馬遷の商人に関する総括は次の如くである。

一旦選択した人は、用人として疑わず、十分に信任して、最大限、自己の特長を発揮させる。そして、彼らに、適切な物質的な利益を獲得させる。

《各其の能に任じ、其の力を竭（つく）し、以て欲する所を得》である。同時に、主人はワーカー達と苦楽を共にする心配りが大事である。この方面について、司馬遷は斉国の刁間（ちょうかん）を大変称賛している。

《斉の俗は奴虜を賤しむ。しかるに刁間は独り之を愛貴す。桀黠（けつきつ、わるがしこい）の奴は、人の患うる所也。唯、刁間は収め取り、之をして漁塩商賈の利を逐わしむ。或いは車騎を連ね、守相と交らしめ、しかも、いよいよ益々之に任ず。》

刁間流のこの種の用人の道は、豪胆・有識とでも言えようか。彼は、人々が患いとする桀黠の奴隸を、自己の商事経営の有力な助手に仕立てた。これらの桀黠の奴隸は皆、その恩に感じ報いようとし、「むしろ爵か、はた刁か」と呼号した。刁間は彼らの聡明・才知を発揮せしめるとともに、また、彼らに金儲けさせたのである。まさに、刁間が〈用人〉に宜しかったことから、

《遂に、其の力を得、富を起こすこと数千萬》（貨殖伝）
に至ったと言う。

商事の経営には商業道德の講究が必須である。これは、司馬遷の市場經濟思想の一大特長であり、また、重要な組成部分でもある。あたかも、漢武帝の時期、若干の不法商人の存在が、市場經濟の發展を妨害したばかりでなく、その上、社会經濟全体の發展、ないし、国家財政にまで危害をもたらした。

司馬遷は真っ先に、商業界における不道德經營の危害性に注意した。司馬

遷の市場経済観点によれば、商人の商事経営は、富家を要するだけでなく、富国にも、社会経済全体の発展にも有利であらねばならない。人民に対しては害なく、政府には妨なく、国家の法律を遵守せねばならない。大変明らかなことだが、漢武帝の時期、多くの商人の行為は、これらの要求に違背した。

《富商大賈、或いは財をとどめ、貧を役し、転穀百数、麀居して邑におく。封君、首をたれ、給を仰ぐ。冶鑄煮塩、財或いは萬金をかさね、国家の急を佐けず。黎民重困す。》(平準書)

また、錢幣を盜鑄した商人もある。

大変明らかなことだが、司馬遷から見ると、これらは皆、取るに足らぬことである。司馬遷は、こう考える。商事を經營して富を致す者は、必ず、

《政に害せず、百姓を妨げず、取予(与)は時を以てする》

《時期を見極めて利益を獲得する》

の境地に到ることが必須である。法を弄び奸を犯すことは出来ない。でなければ、それは奸富である。商業道德の上から、司馬遷は、〈本富〉・〈末富〉・〈奸富〉の3概念を提出している。〈本富〉は農業生産に従事して得た富である。〈末富〉は商業・手工業に従事して得た富を指す。〈奸富〉は各種の違法・禁制活動による致富を指す。司馬遷は、本富・末富を肯定して、奸富を最低としている。彼は、あれらの利を見て義を忘れる〈危身取給〉タイプの奸富には全く輕蔑している。〈本富〉・〈末富〉・〈奸富〉3概念の提起は、深刻な現実的意義と、歴史的意義とをもっていた。前漢時代に、錢幣の盜鑄が氾濫して災いとされたが、これによって富を築いた商人は少なくなかった。但し、『史記』の「貨殖列伝」が記載している、あんなにも多くの富商大賈の中には、誰一人として鑄幣に依って致富した者はなかった。司馬遷から見ると、鑄幣致富は「勤儉タイプの治生の正道」に違反している。列伝に名を残すのは、〈皆、爵邑・俸禄有り法を弄び奸を犯して富むに非ざる〉の賢人である。

司馬遷は、『史記』の中で、さらに市場経済発展のその他の問題に就いて研究を進めている。「平準書」では、主として、漢武帝と桑弘羊とによって進められた、〈以商制商〉タイプの国家統制経済政策の市場経済発展に対する打撃

について研究し、市場経済発展の上からは、自由放任政策を実行するよう、主張している。

秦始皇・漢高祖の〈抑商政策〉は、いずれも中国古代の市場経済の発展を阻止することは出来なかった。しかし、武帝・桑弘羊の〈以商制商〉政策は、多数の商人・手工業者を破産せしめた。

中国の市場経済発展は、低速車線にはまり込み、司馬遷の市場経済思想は、ずっと批判を受け続けて来た。

われわれは、もし、春秋戦国から後漢前期の市場経済が引き続き其の初期の速度で発展していたなら、もし、司馬遷の市場経済思想が批判を蒙ることなく、かえって推賞されていたなら、中国の封建社会の歴史は、異なったページを歩んでいたであろうと信ずるものである。

(訳者あとがき)

「平準書」の記載内容を検討すると、この時期(BC135～110頃)の中国社会の経済には、いわゆる〈戦時統制経済〉の色彩が濃厚に見受けられる。対匈奴戦争の拡大・長期化に伴う財政の膨張は、戦争目的達成を至上命題とする政策当局によって、強行された。その結果、「貨殖列伝」に描かれた市場経済の発展は、今や徹底的なダメージを被り、破滅の淵に追い落とされた。

漢代初期の市場経済の華々しい発展の過程と、武帝時代の市場経済の無惨な凋落の過程とが、これら両篇の中に極めて対蹠的に描き出されている、と言えるのではなかろうか。前者は富商大賈ないし市場経済に対する賛歌であり、後者はそれに対する挽歌 funeral march あるいは鎮魂の missa 曲であるのかも知れない。

(1998年10月)